

東方学院だより

# TOHOGAKUIN

News

1993



3

東方学院だより

# TOHOGAKUIN News

1993

## CONTENTS

### INTERVIEW

学院長に聞く—— 経済と仏教  
……話し手 中村 元…2

### A GUEST MESSAGE

仏教は地球を救う ……………井上信…6

### LECTURES

#### 講座紹介

東京（津田真一教室）

「華嚴経の探究」「大乘仏教思想論」

……………山内胤博…8

東京（石川響教室）

「日本画」 ……………渡邊了恵…9

### LECTURER'S MESSAGE

ヨーガ雑想……………山口恵照…10

### REPORT

経済倫理学会に出席して……………保坂俊司…12

東方研究会創立25周年祝賀会……………13

### STUDENT'S MESSAGE

学院のひろば ……………13

### INFORMATION

事務局から ……………14

### 表紙写真

シルクロードを行くロバ車=昔亀茲国と呼ばれて  
いた庫車郊外にて（撮影：桜井俊彦）

発行日 1993年3月28日

## INTERVIEW

### ◎中村元学院長に聞く◎

# 経済と仏教について

哲学者・仏教学者はとかく社会問題とかけ離れた存在と見られている風潮があるので、時の問題をとりあげて、毎回インタビューをします。

◇「自己」をむなしくして…

—— 日本的な経済倫理を、仏教とのかかわりと交えてお話いただきたく思います。

『東方6号』に掲載されていましたが「君子財を愛す。之を得るに道有り」ということを、このところの時代と照らし合わせてお話いただけますでしょうか——

以前から、識者はこのことについてお考えになっていたでしょうが、「経済が順調に伸びている時は、日本の経済は大丈夫な



学院長室で気楽にインタビューに答えられる中村先生（インタビュアー高橋法子）

んだ。ただ、日本人の他の方面の指導者がしっかりしていないだけだ」と言われていました。この経済の問題について、仏教と照らし合わせてお話ししましょう。

たとえば、仏教が広がる場合に、経済の問題とは切り離しては考えられないのです。それは、大きな寺院を建てるには莫大な費用が必要となります。それを喜んで醸出（金銭・物品などを出し合うこと）した人、あるいはその事業に従事した無数の人々がいたわけですから。

ただそれを自覚的に論じられたのは、いろいろと文献を調べましたが、鈴木正三（一五七九—一六五五）が最初と思われる。それ以前の方々（栄西・法然・道元・親鸞・日蓮）は、決して経済活動を無視していたわけではありませんが、絶対の仏さまを心に思い浮べておられたので、世俗の問題についてはあまり触れようとはされなかったのではないでしょうか。ところが、鈴木正三は「世法則仏法」ということをはつきりと説いたのです。これは、各人が世俗のそれぞれの職業生活に従事して、自己をむなしくして人々のために尽くすのが仏道修行であるということです。その自己を



むなしゅうして人々のために尽くすというところには、仏教思想がはっきりと出てくるわけです。現在でも会社の仕事に金をもうける手段だけではなく、そこに生きがいを認めているところは、日本人のな一つの例でしょうね。

◇人びとのために…

—— 釈尊の時代は、古代インドの経済成長期にあたる時代と思いますが、そのときに大富豪や商人に釈尊はどのような教えを説いたのでしょうか——

聖典や、碑文の中にそれらの教えが残っており、西洋のキリスト教では、商業資本に対して敵対的でした。だから少なくとも中世では利子を取ってはいかんと説いています。利子を取るユダヤ人はその理由から迫害されたのです。

しかし、仏教にはそのようなことはありません。仏教教団は、土地の寄進を受けると、それを荘園とした。そこからのあがりで教団のいろいろの行事を行ない、そこからの収益を商人に貸し付けていたので、その貸付の利子が教団の経費になっていました。利子を取るのとは当然なこと

と、碑文の中にはっきりと示されている。

しかし、利子の規定はあまりないので、教団で規定したのではなく、当時の経済情勢によっておのずから落ち着くところに落ち着いています。つまり、経済現象は自然現象と同じで、無理に人工的に手を加えても思うようにならないということではないでしょう。

利益を大事にして、人々のために生かして使うということが、原始仏教以来重んじられています。「よく働いて名声を得て財産を蓄積する」ということは、人生の理想である」として、パーリ語の聖典に説かれています。これを説いたということは、商人を当然眼中において意識していたといえると思います。

◇宗教教育の必要性

——ではこのところ騒がれていますバブル経済についておろかがいししたいと思えます

バブル経済がいけないというのは、仏教

の原則の立場から言えましようね。

・人に迷惑をかけてはいけない  
・人に害を与えてはいけない（人を傷つけ

てはいけない）

人に損害を与えてはいけないという、はっきりした原則が仏教にあるわけですよ。バブル経済は一時的な好況にうかれて、結果的には人に害を与えたのです。

——では、バブル経済で失ったものは勤勉と儉約の精神でしょうか——

全部が全部とは言えませんが、一般の人から大経営者にいたるまで、樂をして儲けようという考えかたになったのは事実ですね。

——このような問題の解決に対して、仏教思想が貢献する点は大きいでしょうか——  
仏教の思想は、現代の問題解決には役立つなと思われがちですが、根本の精神というものは普遍ですから、もう一度見直して考えるべきでしょう。

ところが、今の日本の教育には、宗教教育がありません。だから、享樂的きやうらくな方向へと進みがちなのです。ひとたびその方向へ進むと、押さえがきかなくなり、日本の将来には恐るべきものがあると思えます。バブル経済が引き起こした問題が、それを象徴しているのではないでしょう。



人間の美德とか、高尚な性格というものは、何らかの宗教によって養われる点が非常に多いわけですからね。

——宗教理念をもった経済活動が必要ということでしょうか——

そうですね、これからは長期の経済計画を立てなくてはならない。そのためには、宗教的な理想をそこに生かすような方針を樹立しなくてはいけない、ということだろうと思います。

——こういう人を育てるために、仏教は宗派を問わずして教えを説くという理想が役立つと言えますか——

これは国により時代によりですね。仏教が影響を及ぼした側面と言いますか、方面領域が違いますので、今後どのように生かしたらいいかということが大問題でしょうね。

東方学院では、他の国の宗教教育の問題や影響を調査して研究していくということも考えております。今の仏教教団の指導者は、大きな建物を建てるとか、大きな仏像をつくることに夢中になつていて、大事なことを忘れていきますね。そうすれば信者さんも集まってきて、経済的に成り立つわけ

ですから(笑)

#### ◇官僚政治への聖徳太子の戒め

——日本の経済はガタガタになっていますが、その元凶の一つに、天下り官僚の弊害があったと言われていますが、政治を建て直さないかぎり、経済の建て直しもできないのではないのでしょうか——

そう思います。政治の改革と経済の立て直しは盾の両面みたいなので、日本の経済がこれだけ発展したのは国家権力との結びつきが強かったからでしょう。結びつきと言いまじょうか、援助したこともあれば、干渉していることも多いわけです。それをやっているのが官僚ですね。

聖徳太子の『十七条憲法』に「官のために人を求む。人のために官を求めず」、官職に適当な人を任せよ。人を見て官職を作るな、という言葉があります。お役人が聞いたら耳が痛いな。(笑)

適材適所でなければいけない。やめる人のためにポストを作つてあげようというのは無理なんです。お役人にも一種の役人エゴイズムがありますからね。

——今日、経済ばかり問題にされていますが、それだけでなく、政治さらにはその基礎にあるところの精神まで考えることが肝要ということでしょうか——

一言で言い表わしますとそうなりますね。そしてね、各々の分野がたとえば仏教は仏教、経済は経済というように何のつながりもないと論じるのではなく、それらのものがお互いに交渉をもちつつ問題を解決していくのが必要と思っております。

——きょうは幅広い分野におけるお話をうかがいまして、本当にありがとうございしました。仏教の良さ、東洋の心を現代に生かすことができれば、この世の中も再活性化できる、そのような明るい未来を考えるとができました——

☆聞き手 東方学院受講生・高橋(室伏)  
法子(日本食品流通システム協会理事)  
まとめ 同受講生・福島洋子



# 仏教は地球を救う

井上 信一（高千穂商科大学理事長・前宮崎銀行頭取）

◎仏教は経済を嫌わない

仏教と経済との関係は仏教成立の時と同じくする。王城を脱出したシッダールタ太子はまず苛烈な苦行を試みたが、それが正しい悟りへの道でないと気付いて中止、川の辺で村娘の捧げる乳粥を飲み衰えた肉体を癒して禪定に入りそれによって覺りを開き釈尊となられたことは周知の所である。健康の為に飲食することとはまさに経済行為だが、それが覺りに不可欠と釈尊は考えられたわけである。もとより衣食（経済）を食することは釈尊の戒めの根本となっている。ここに「中道」の精神が示されていて「経済を否定せず、経済に

溺れず」が仏教の姿勢である。そこで釈尊の弟子に多くの長者（金持ち）が集まった。『平家物語』で有名な祇園精舎は、これら長者の一人が釈尊教団に寄進したものである。この現象は「富んでいる者が神の国に入るよりは、ラクダが針の穴を通る方がもつとやさしい」という『バイブル』の言葉とは正反対である。従って中世のカトリックが利子を禁じたのと反対に、仏教教団が基金を運用するのに利子をとることは問題なく、これが最近迄存在した相互銀行のものとの無尽（会社）の源なのである。

聖徳太子がわが国に仏教を迎え入れられた時、在家仏教を強調されたことも右の延長線上にあり、それが太子の福祉事業となり今日に形を遺している。鎌倉仏教の宗祖の言葉の中にも同様の精神を見出すことは容易だが、ここでは道元禪師の「治生産業もとより布施にあらざることなし」のものをあげる。

徳川時代に経済活動が盛んになるに應じ三河武士から禅僧に転じた鈴木正三は、経済行為を「一仏の徳用なり」と認め、例えば農民には「一畝一畝に南無阿弥陀仏と耕作」するよう教えた。それがマックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で述べた所と符合するとして、米国のベラー博

士などが注目し、その実例を近江商人の中に見出している。

◎誤解は経済人の側にある

このように仏教は経済を正しく評価し且支えてもきたが、現代経済人が「白隠の片手（隻手の声の公案）の声を聴くよりも両手叩いて商いをせよ」の狂歌に拍手を送るのは何故だろうか？ 今から二十余年前『中央公論』が財界にアンケートを試みた時、後にロッキード事件で醜名をばせた某トップが「財界人にとり仏教は無用である」と答え、これを見た安田生命の社長故竹村吉右衛門氏が痛く慨歎、仏教の正しい姿を特に経済人に知って貰いたいと創刊したのが、今私がお世話をしている『心の糧』（毎月百円の月刊誌）である。

わが国最古の企業は住友であるが、その近代化の推進者ですぐれた禅者でもあった伊庭貞剛（二代目總理事、大正十五年没）は、「君子財を愛す、之を取るに道あり」の語を好んだ。

今眼前に展開している政財界の不祥事はこの文章の後半を忘れたものである。驚くべき事に聖徳太子の十七条憲法は先頃の証券会社の損失補填問題を見透している。第五条に云く「財ある者の訟は石もて水に投ぐるが如く、乏しきもの（一般投資家！）の訟は水もて石に投ぐるに似たり」そしてこの文章はそのまま親鸞聖人の『正像末和讃』に引用されている。

### ◎経済学変革の必要性と可能性

伊庭のいう「道」は果して現代経済学の中に在るのであるか？ 経済学の祖といわれるアダム・スミスが、『国富論』の中で「各人の利益追求（競争）が見えない手によって社会の利益を増進する」と述べた言葉が、現代経済人の根本信条になっている。実はスミスが別の著『道徳感情論』の中で、自己自身を冷静に見つめる「内なる人」の声に各経済人は耳を傾けるべし、と説いたことは余り知られていない。

積尊当時も今の経済人に似た人が

いたらしく、「積尊はご自身が可愛くないのですか」と質問したという。その時積尊は「私も自分の身が一番可愛い。但、他の人も自分自身が一番可愛いことを私はよく知っているだけだ」と答えられた。これは儒教のいわゆる恕であり、キリスト教の精神にも通じる筈である。



聖徳太子

ければならぬ。親鸞聖人は和讃の中に「自利利他円満」という句を用いているが、それが新しい経済学の理論にならなければならぬ。その理論・理念は神儒仏合一に立つ二宮尊徳の報徳経済学が「風呂の湯の喩え」で既に説いた所であるばかりか、米国のフォードが消費者と労働

有名なケインズ先生も「経済学しか知らない経済学者は大した経済学者ではない」と云っているが、現実には自利追求の経済学しか知らない経済人が殆どである以上、その経済学自体が変わる以外に現状を救う途はなさそうである。それには、自利と利他との両立する経済学が可能でな

者ごとにそれぞれ製品値下げと労働引上げという利益を与えて自動車王となった道であった。また、製鉄王カーネギーの信条「他人の利益を害からないで幸せになれない」を自らのものとしたYKKの創始者吉田忠雄氏は、その経営に「善の循環」という信条を採り入れ世界的ファス

ナー企業を育て上げている。

### ◎期待される仏教の役割

目下の世界的課題は地球を救うことにある。一昨年、米誌『タイム』はその新年号を地球特集号とし、地球の危機に国際的に対処する具体策を提言した。その中で欧米人の考えの根本にある『バイブル創世記』の、「人間に地（球）を従わせ生き物を治め、させた至上主義も地球を危うくする一因だと反省している。まことに敬服すべき見識である。

それは「山川草木に仏性あり」とする仏教思想への期待を暗示するものである。しかも救済策はECの委員長だった（一九七〇―七二）マンホルトが指摘したように、人口と欲望との抑制なしには実現不可能なのである。だから、龍安寺のつくばい（庭の手洗い鉢）の「吾唯足るを知る」の仏教精神により、欲望無条件肯定の現代経済学を修正する必要は疑うべくもない。仏教が経済と経済学とに対し果たすべき役割は実は大である。



## 講座紹介

東京

津田真一先生

- 華嚴経の探究
- 大乘仏教思想論



授業風景

津田先生は、東方学院設立当初より今日にいたるまで一貫して大乘仏教の思想を、卓越したサンスクリットの語学力と先生独自の仏教思想解釈によって、我々一般人にも解るように講じてこられた。

まず前半の「華嚴経の探究」においては、膨大な『華嚴経』のサンスクリット語原典を購読しておられる。原典に忠実に厳密なその読解力に生徒一同ただただ驚嘆するばかりである。

この厳密な読解力があってこそ「後半の大乘仏教思想論」によって展開される津田先生独自の世界観に基づき、仏教哲学の新たな解釈がきわめて強い説得力を持つてくるのである。

現在、教室に入りきれないほどの受講生の多くは、先生の大胆にして斬新な仏教思想の解釈に魅了されているのはもちろん、先生の温かい人柄に深い尊敬の念を抱いている。

先生はよく、生徒と酒宴を催されるが、津田先生の教室は家族的な雰囲気があったよっている。(受講生)

昭和六十一年四月開講された月二回の日本画教室もこの三月で満六年となった。講師は日展評議員であり、審査員もされている石川響先生である。

昭和六十二年の名簿によると受講生は十名(男性四名女性六名)で、当初教室は上野の禅寺末雲院であったが、丸ビルの聖徳太子奉讃会に移り、人数の関係もあって現在は再び末雲院に戻っている。最初の一年間は日本画のイロハの講義と実技の指導があつたが、現在は個人指導となり、自分の立場で研修している。というのは受講生の絵のキャリアには相当な幅があるためである。例えば盛岡から日帰りで受講している女性は、既に県展特選をとり、日展にも入選している。また別の女性は、長年日本画の塾を開き個展・グループ

展を幾たびか経験している。さらには水彩画を十年以上も続け、都美術館での「大調和展」に連続入選しているが、日本画は初めてという人などが在籍しているためである。

先般Sさんが『夕暮れのすずき』を画いてきて「先生これを雪の夕暮れにしたいのですが」といつもの調子で指導をお願いしたところ、先生はニコニコして、すぐ絵の前に坐られ、白い絵の具でポツポツ雪片を加彩され一通り終ると「Sさん、この上から夕暮れの色をもう一度ぬってみるんだね」とおっしゃった。Sさんはせっかくならうと頂いたのにと困った顔をしたところ「夕暮れに奥行をつけるのだよ」と言われ、周囲で見ていた全員がなるほどと感得したひとときがあつた。

先生始めみんなが楽しみにしてい

る三時のおやつには、甘いおやつを頬張りながら、先生の現代世相話など伺い、共感する機会が多く、大変な熱気となり、ついつい休憩が長くなってしまふ。

年に二回ほどの野外スケッチをして、一昨年第一回のグループ展(学生しょうかい会展)を銀座の画廊で行なった。全員二点(内一点は課題「散華」)

を披露し、中村先生を始め多くの方々に観て頂き、昨年は第二回展を催し大変好評を得ている。

一九九二年記(受講生・藤波哲太)

昨年の七月には仏教彫刻と日本画部の合同展を、インド大使館を会場として開催した。



仏教彫刻と日本画部の合同展

# ヨーガ雑想

—近況報告にかえて—

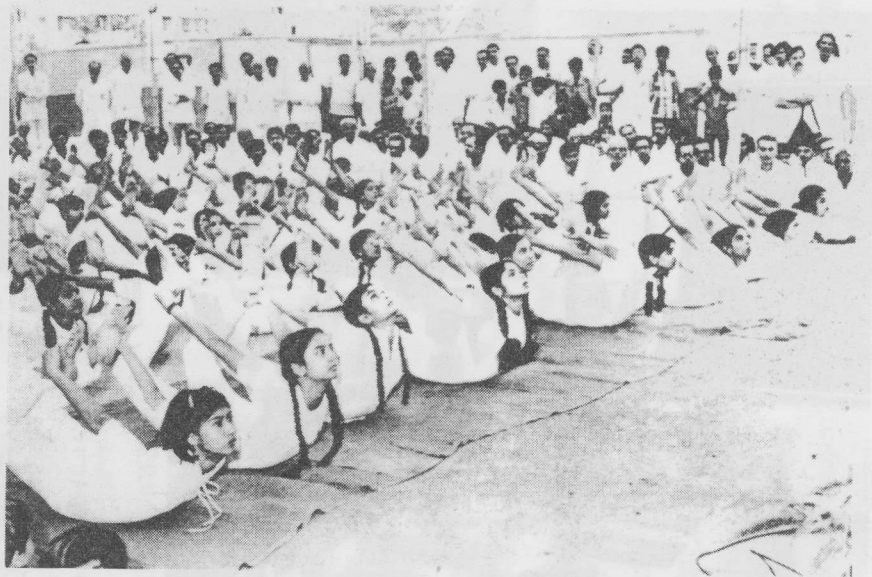
山口 恵照

ここにヨーガとは、まず、総じてからだの動作を意味する。といって、注意深くなめらかに呼吸を連動させながら、からだを動かして或るポーズをとることを条件とする、といったほうがよいかも知れない。これは、ハタ・ヨーガの伝える「らくだ」「魚」「すき」「弓」「逆立」「孔雀」といった体位体操や、肛門・咽喉・横隔膜・を使うバンダ（引き締め）体操、さらに呼吸法・瞑想法（座禅法）に当てはまるのである。

ハタ・ヨーガをば前記の条件を心

得て修めるならば、日々の健康感がよみがえり、若さとバイタリティを維持するとともに、心を安定させて明確な判断力や鋭敏な直観力の持主となり、さらに魂の底から生きるよろこびが湧いてくる、と言われる。これはいいかえると、総じてからだを使ってやる日々のヨーガが病気を退けて健康を保持増進するのに役立つばかりでなく、煩惱を静め心を統一して、人を息災・安穩（不動）の境地にいたらしめる方法（道）だということの意味している。

このようなヨーガの理解ないし評



ヨーガ風景

“मानवतेचा उपासक”より

価は、ヨーガの研究の結果として生まれたものであるが、ヨーガの研究の成果とはかならずしも一致しない。ヨーガの研究ならば、これは、ヨーガの達人によって説かれた『ヨーガ経』等の教典を諳解しその

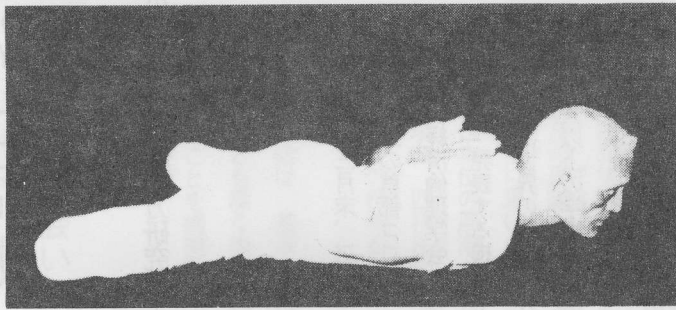
成果を記述してまとめることをもつて、まずは可とすることができよう。しかし、前記のごとき理解ないし評価を主とする場合、ヨーガは研究者のいわゆる研究成果の枠を超えて別な役割を担いこれを果たすもの



だということになる。つまり、だれでもの人生の確かな指針となり、かつ、だれでもの人生の深いよろこびとなって役立つのがヨーガなのだという。これは、ヨーガ教典の読解・記述といささか区別されるべきものである。

しかしヨーガの教典の読解・記述と無縁であるかといえば、そうではない。ここに問題は、ヨーガの研究を可能ならしめる問題意識にあるように思う。ヨーガの研究がその成果を論文として寄稿することを目標とする場合、単に論文としてまとめることをもって可とするのと、だれでもの人生の指針たることを願いつつ論文としてまとめるのと、この両つは両つである。いずれも論文である限り、論文の条件をそなえている点で同じようなものであっても、主として何を願うとするかの点が異なっているというべきであろう。

『ヨーガ経』をとり上げてこれを読解・記述しようとするとき、この『経』の著しい特徴に気付かされる。その主要問題が総じて誰でもの



“मानवतेचा उपासक”より

विपरीत नमस्कारासन

人生の指針にかかわり人生の指針をアピールしているように見える。章別には三昧・方法・神力・独学という主要問題の標示があり、はじめにヨーガを定義してヨーガの目標を掲げている。いわく、「ヨーガとは心の「煩惱」はたらきを静めることだ」と。心の煩惱を静寂ならしめることをもってヨーガだという。これは人間の現実と理想にかかわる仏教やサーンキヤの教えと同じで、解脱（モークシャ・自由）と涅槃（ニルヴァーナ・平安）を明かすものであるが、『経』の全体の構成はその要語を仏教やサーンキヤから借用（？）して一見、雑算的ざつざんてきであり、体系としてなお問題を残しており、従来、『経』を分析して章別のテーマとは別個に、原初の部分とそれに付加された部分とを想定して説明する方法がしばしば執られてきた。その結果、『経』の中心問題は「方法章」「神力章」の主要内容である「八支分ヨーガ」であり、これに「三昧章」、次いで「独学章」が後から加えられて現存の『経』が成立

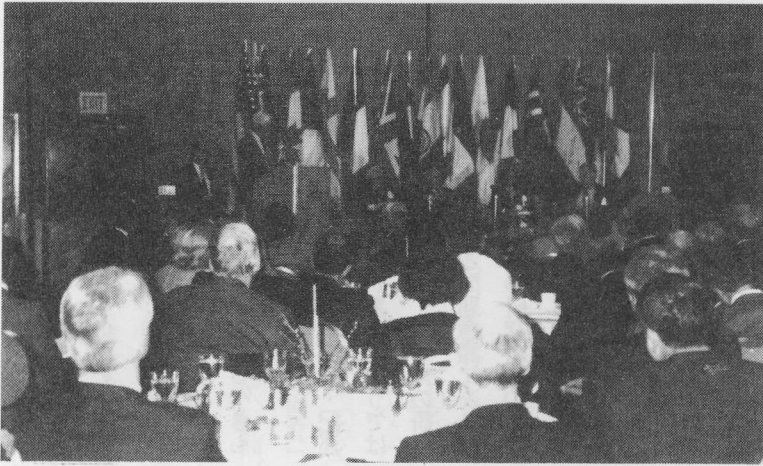
した、というのが大方の見解であるが、そもそもヨーガの中心は何かを問題とする場合、心の煩惱の静寂をヨーガだと定義する『経』のヨーガ説を人生の指針として受取るようにすると、「三昧章」のはじめのこのヨーガ説が解脱・涅槃をアピールし、ヨーガの根本問題を独自に説明しているように考えられる。これはいかなるものであろうか。尤も、「独自に説明している」といっても、一面、サーンキヤ説に、他面、仏教に傾斜しつつ果たされているので、ひとすじ縄でいけるものではない。『経』のヨーガの成立をとり上げる方法はいろいろあるが、筆者はいまこのようにして、仏教やサーンキヤとも共通する広義のサンスクリット文化圏というものを想定し、この圏内にヨーガがどのように位置し意義づけられるのであろうかということを考えている。

（東方学院理事・関西教室責任者、大阪大学名誉教授、叙勲）

## 経営倫理学会に出席して

保坂 俊司

(麗沢大学講師・前東方研究会主事)



会場風景

私は、昨年三月末、アメリカの東部オハイオ州の首都コロンバスで開催された「経営倫理学会」の世界会議に出席し、発表する機会を得た。同会議には世界の二十二カ国から三百五十人以上の学者・経済人・宗教家が出席した。会議の開催時には、時期を得たテーマということもあったのであるが、英国のチャールズ皇太子がビデオではあったが、メッセージをくださった。この一例でもわかるが、この会議は世界中でかなり注目されたようである。

本会議は、三月二十四日から二十七日までの四日間、コロンバスの公会堂（オペラハウス）を中心に開催された。

そのプログラムの一端を示すならば、朝七時より朝食をとりながらの打ち合わせに始まり、八時二十分から、発表、討論会、昼食をとりながらのスピーチ。その直後には質疑応答があり、会場を昼食会場より元の公会堂に移して夕刻まで小グループに分かれての討論会。夜は夕食をとりながらまた講演会と質疑応答が延々十時までつづくのである。このようなスケジュールが四日間続いた。まさにハードスケジュールとはこのようなことをいうのであろう。

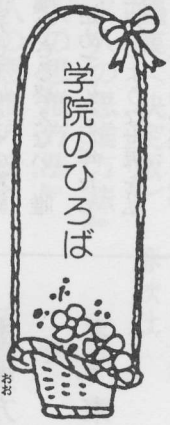
しかし、この会議の素晴らしさは、単に学問的なものだけではなく、地元のボランティアの人々との交流をとおして知ったアメリカの人的格の高潔さに私は大いに感心したのであった。

さて、私の発表テーマは、「仏教における経営倫理思想」であった。ユダヤ教・キリスト教（プロテスタ

ント）・イスラーム教の各代表者の中に交って仏教徒を代表した形で、このテーマを発表することになり、自らに課せられた荷の重さに悩みつつも、中村先生や永安幸正麗沢大学教授のご指導により、何とか大任を果たしたことは、私としても大きな喜びであった。

左右に並んだ大学者の発表は、さすがにすばらしいものであった。しかし、ユダヤ教・キリスト教などのセム系の宗教の思想を基礎としている現代の経済思想や倫理思想が、限界に達している今日、仏教思想の持つ、調和と協調の思想に、彼等からも注目されているということ、肌で感じる事ができたことが、私には最大の収穫であった。

しかも、仏教思想の中には、他の世界宗教に決して劣らない政治・経済等の現実世界に通用する哲学があることを改めて発見したことも、今回の会議に出席して得た成果であった。今後は、この点をさらに明確にできるように精進して行こうと思



## 仏教と経済

林博

日本経済の戦後復興の一因として、日本人の勤勉性が挙げられている。山本七平氏は日本資本主義の精神的基礎として、鈴木正三の思想を取り上げた。『事業は皆佛行なり、人々の所作の上において成佛したまうべし』即ち「世法則ち仏法」、

「成佛の方法」仕事である。日本人は働いていると安心し精神的安定と充足感が得られる。却って余暇ができるると焦燥感と不安感に苦しめられるようでもある。現在労資共に労働時間の短縮を実施しようとしているが、仲々うまくゆかないのもこの辺にも原因があるのかも知れない。

さて戦後復興を成し遂げた日本経済は、ここ数十年にして曾<sup>か</sup>つてない繁栄をとげたが、反面経済倫理の衰

退は眼を蔽<sup>おほ</sup>うばかりである。物質的欲望は更なる欲望をよび、所謂<sup>いわゆる</sup>バブル経済なる狂乱状態を現出した。今こそ三輪清浄の御論<sup>おきご</sup>し、清浄なる施者<sup>せしや</sup>、受者<sup>うけ</sup>、施物<sup>せぶつ</sup>に思いを到すべきであり、又自己本位の風潮が極めて強くなっている現在、四攝法<sup>しよさつぽう</sup>の教える他人への思いやりの精神が必要なのであるまいか。

以上経済生活は、基本的問題、具体的行為ともども深く佛教と関わりを持っていることを痛感致します。

## 唯識との出会い

曾<sup>そ</sup>雌<sup>し</sup>美知恵 (受講生)

自然的態度の思考を離れ、認識の本質および可能性の諸問題に対する立場に立つて考える時、認識はどのようなにして対象との一致を確認し、

第二二回鎌倉夏期宗宗教講座  
テーマ 「神道と仏教の対話」  
(予定)

八月十九日午後一時より

中村 元学院長あいさつ

講演 阿部 慈園先生 (明治大学助教授)

三友 量順先生 (立正大学教授)

八月二十日午後一時より

講演 蘭田 稔 先生 (京都大学教授)

中西 正幸先生 (國學院大学教授)

場所 鎌倉鶴岡八幡宮・直会殿

会費 四千五百円 (東方普通会員は三千五百円)

協賛 鎌倉鶴岡八幡宮

\*申し込みは往復葉書にて東方学院事務局まで。





## 事務局から

### 東方研究会△云研究員出版図書一覽

またそれの中しうるかという哲学上の大問題が生じる。近代現象学は、超越的認識をすべて還元することにより、主観の中で疑えないという妥当（確信）がどのように生じるかという条件を突き止めることで、主観—客観問題に対する一つの解決を見出そうとした。ところが唯識学は仏教の立場から、主観（我）も客観（法）も識の転変によって現出された虚妄であるとする大胆な説を唱える。目的も時代も異なる二つの学説を単に比較しても無意味ではあるが、同じ心という立場から出発して、それぞれの結論へと進む過程をたどるのは興味深い。さらに、唯識が仏教の究極目的である解脱（げだう）の道を解き明かすための哲学であることを考えると、様々なドクサにまつた心や心身を還元していくその精緻な理論には驚嘆せざる終えない。唯識学を研究し始めてから二年たつが、これから先どのような世界を私の前に展開してくれるのか楽しみである。

- |                    |                    |       |      |
|--------------------|--------------------|-------|------|
| 阿部 慈園              | 『インド仏教文化入門』        | 東京書籍  | 1989 |
| 阿部慈園（文）・石川響（画）     | 『インド四季暦』           | 東京書籍  | 1992 |
| 川崎 信定              | 『原典訳チベットの死者の書』     | 筑摩書房  | 1989 |
| 川崎 信定              | 『一切智思想の研究』         | 春秋社   | 1992 |
| 菅野 博史              | 『法華とは何か—『法華遊意』を読む』 | 春秋社   | 1992 |
| 田上 太秀              | 『菩提心の研究』           | 東京書籍  | 1990 |
| 中村 元               | 次頁参照               |       |      |
| 中村元・三枝充恵           | 『パウツダ 仏教』          | 小学館   | 1987 |
| 中村元・奈良康明           | 『仏教の心を語る』          | 東京書籍  | 1990 |
| 中村元監修・丸山勇写真・堀内伸二解説 | 『般若心経の世界』          | 立風書房  | 1992 |
| 奈良康明監修             | 『ブツダから道元へ—仏教討論集1』  | 東京書籍  | 1992 |
| 保坂 俊司              | 『シク教の教えと文化』        | 平河出版社 | 1992 |
| 松本 照敬              | 『ラーマーヌジャの研究』       | 春秋社   | 1992 |
- （以上は事務局へ寄贈されました図書です。）

\* 東方研究会・東方学院関係者は著者割引にて入手できます。

\* 『東方』一〜七号を 特別頒布致します。 各巻 三千元。

△右記の申し込みは東方学院事務局まで。 V

中村 元選集（決定版） 春秋社

『インド人の思惟方法』	一卷	1988
『シナ人の思惟方法』	二卷	1988
『日本人の思惟方法』	三卷	1989
『チベット人・韓国人の思惟方法』	四卷	1989
『ヴェーダの思想』	八卷	1989
『ウバニシャッドの思想』	九卷	1989
『思想の自由とジャイナ教』	十卷	1990
『ゴータマ・ブツダ』	I 十一卷	1992
『ゴータマ・ブツダ』	II 十二卷	1992
『仏弟子の生涯』	十三卷	1991
『原始仏教の成立』	十四卷	1992
『原始仏教の社会思想』	十八卷	1993
『ブツダ入門』		1991
中村元対談集 東京書籍		
『釈尊の心を語る』	I 1991	
『東と西の思想を語る』	II 1991	
『社会と学問を語る』	III 1992	
『日本文化を語る』	IV 1992	
『聖徳太子』		1990
東京書籍		

こころを読む 全七巻 東京書籍

『原始仏典』	I 釈尊の生涯	1987
『原始仏典』	II 人生の指針	1987
『大乘仏典』	I 初期の大乘経典	1987
『大乘仏典』	II 法華経	1987
『大乘仏典』	III 浄土経典	1987
『大乘仏典』	IV 発展期の大乘経典	1988
『大乘仏典』	V 完成期の大乘仏典	1988
『東洋のこころ』		1985
『佛教の心を語る』		1990
『佛教語大辞典』		1975
『図説佛教語大事典』		1988
『人生を考える』		1991
『合理主義』		1993
東京書籍		
青土社		
青土社		



聖徳大王神像 飛天 全十巻27巻